

主日礼拝説教「市場価値より至上の価値」予稿

日本基督教団石神井教会 2022年10月23日

【旧約聖書日課】ヨブ記 38章1～18節

- 1 主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。
- 2 これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて
神の経綸を暗くするとは。
- 3 男らしく、腰に帯をせよ。
わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。
- 4 わたしが大地を据えたとき
お前はどこにいたのか。
知っていたというなら
理解していることを言ってみよ。
- 5 誰がその広がりやを定めたかを知っているのか。
誰がその上に測り縄を張ったのか。
- 6 基の柱はどこに沈められたのか。
誰が隅の親石を置いたのか。
- 7 そのとき、夜明けの星はこそって喜び歌い
神の子らは皆、喜びの声をあげた。
- 8 海は二つの扉を押し開いてほとぼしり
母の胎から溢れ出た。
- 9 わたしは密雲をその着物とし
濃霧をその産着としてまとわせた。
- 10 しかし、わたしはそれに限界を定め
二つの扉にかんぬきを付け
- 11 「ここまでは来てもよいが越えてはならない。
高ぶる波をここでとどめよ」と命じた。
- 12 お前は一生に一度でも朝に命令し
曙に役割を指示したことがあるか
- 13 大地の縁をつかんで
神に逆らう者どもを地上から払い落とせと。
- 14 大地は粘土に型を押していくように姿を変え
すべては装われて現れる。
- 15 しかし、悪者どもにはその光も拒まれ
振り上げた腕は折られる。
- 16 お前は海の湧き出るところまで行き着き
深淵の底を行き巡ったことがあるか。
- 17 死の門がお前に姿を見せ
死の闇の門を見たことがあるか。
- 18 お前はまた、大地の広がりやを
隅々まで調べたことがあるか。
そのすべてを知っているなら言ってみよ。

【福音書日課】ルカによる福音書 12章13～31節

¹³群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」¹⁴イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」¹⁵そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできない

からである。」¹⁶それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。¹⁷金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、¹⁸やがて言った。『どうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、¹⁹こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しみ」と。』²⁰しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。²¹自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

²²それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。²³命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。²⁴鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。²⁵あなたがたのうちのだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。²⁶こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。²⁷野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。²⁸今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。²⁹あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。³⁰それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。³¹ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」

神の前に豊かになる！【こども説教のために】

主イエスは、今日の福音書で、「ただ、神の国を求めなさい」とおっしゃられました。この主イエスに導かれて、わたしたちは、日曜日の教会に、何よりも「神の国」を求めて、集まってきたのです。

毎日の生活の中で何かと思ひ悩むことの多いわたしたちです。そのわたしたちを、神は、日曜日の教会にお集めくださいます。御前に祈りと讃美をささげる礼拝に加えてくださいます。主イエスの教えを通して、御心に思いを向けさせてくださいます。

神の御前に進み出たわたしたちは知っています、この神の御前に立つのは、わたしたちだけではないことを。世界中の教会に集められ、日曜日の礼拝に加わる者たちだけでもありません。すべての者が、神の御前で、同じように生かされ、立たされ、人生を歩んでいます。いいえ、死んでなお、すべての者は、神の御前に立つ者だと言ってもよいでしょう。先主日の「ヨハネの黙示録」は、天上にあって、神の御前に白い衣を着た数えきれないほどの大群衆が集められているという幻を、ヨハネが伝えていました。

この世界をお造りになられたお方の前に、すべての者が立たされています。その一人ひとりに必要なものが何か、神はご存知です。天の父はご存知です。わたしたちの誰かが、神の恵みを独り占めしたり横取りしたりしなければ、わたしたちは皆そろって、神の前に豊かになることができるのです。

「今夜、お前の命は…」

10月下旬の秋らしい季節を迎えると、わたしは、二十歳だった年のことを必ず思い出します。6月に天安門事件があり、秋にはベルリンの壁が打ち壊された年です。その年の10月最後の日曜日の午後、教会の青年たち十数人で都内の公園に遊びに出かけました。ほとんどが中高生のころから教会に入り浸ってきた仲間たちです。特別な行事ではなく、秋晴れに誘われて、たまには教会から出て遊ぼうということになりました。午後いっぱい、子どものように公園で遊び、夕食をファミレスで一緒にとり、解散しました。また次の日曜日には、いつもと同じように教会で顔を合わせると信じて。けれども、翌月曜日の夕刻、教会からの連絡網を受けた母から、一人の青年の死を告げられたのです。前日に皆と一緒に公園に遊びに行った一人でした。持病がありました。命にかかわるものとは聞いていませんでした。その彼が、月曜日の朝、自室の布団から起き上がることがなかったのです。寝ている間に心不全を起こしての病死だった、と聞かされました。身近な祖父母の死は経験していましたが、同世代の親友の死は、はじめての経験でした。

「今夜、お前の命は取り上げられる」。そうたとえてお語りになれる主イエスの言葉は、少しも大げさではありません。わたしたちは誰でも、今日、自分の命が、大切な人の命が、取り上げられるかもしれないのです。

わたしは、幼いときから、「人が死ぬとは、どういうことだろう」と思い悩んで眠れぬ夜を過ごすことがありました。それは、誰にでもある経験かもしれません。子どもたちが一人で学校に通い始めてからは、いつも、「もしかすると、この子の命は、今日、帰ってくる前に取り上げられるかもしれない」と思いながら、あるいは、「もしかすると、今日、この子が返ってくる前に、自分の命は取り上げられるかもしれない」と思いながら、家を出る子らを見送ってきました。覚悟を決めてきました。

そうかと思うと、わたしは、人一倍心配性の傾向もあるのです。今は牧師ですから、どうしようかと思ひ悩むような財産を蓄えることはできませんが、子らが自立するまでに必要な資金のことを考えたら、悩みは尽きません。食べる物に頓着はありませんが、健康な体であろうとして栄養素や身体の管理にこだわってしまうところがあります。衣服は、今は普段から牧師服しか着なくなりましたが、それは、服装に悩んできた末の結論にすぎません。

「今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」と教えられて、その通りだと受けとめながら、他方では、何かにつけて「どうしようか」と思ひ悩み続けている。「ヨブ記」のヨブが、全財産や子らを奪われたとき、「主は与え、主は奪う」（ヨブ 1:21）と告白したことに同意しながら、なお、思ひ悩み続けているのです。

「ただ、神の国を！」

これは、わたしのことを知ってもらいたくて話したのではありません。皆さんご自身がどうなのか、問うていただきたいのです。自分は、もう「思い悩み」から解放された者なのか。それとも、主イエスの「思い悩むな」という励ましにもかかわらずなお、「思い悩み」にとらわれ続けている者なのか。

あのヨブも、「思い悩み」を続けた人でした。

食べ物のことや衣服のこと、自分の体のことで思い悩んだわけではありませんでしたが、彼もやはり、「自分のこと」で思い悩んだのです。「自分の正しさ」のことで、どうしても納得できないことがあって、思い悩んだのが、ヨブでした。「自分は誰よりも正しい生き方を、神の前でも、人の前でも、貫いてきた。それでは、今、自分が被っている苦しみは、いったい何のためか。どんな意味があるのか」。ヨブは、そう思い悩み、友人たちと対話を重ねましたが、答えは得られませんでした。それでも、彼は、その「思い悩み」を脇に置いて、新たな歩みを始めた人でした。そうすることができた人でした。彼は、自分の受けた苦しみが、何のためなのか、どんな意味があるのか、答えを得られぬままでしたが、ただ、この世界を統べ治められる神の前に立つことで、次の一步を踏み出したのです。

主イエスは、「思い悩むな」と勧めた弟子たちに向かって、なお、「**信仰の薄い者たちよ**」と憐みの思いを向けてくださいます。弟子たちが「思い悩み」から完全に解放されて、悟りを開いた聖人賢者のようになれるなどとは、お考えではなかったのです。いいえ、それは、主イエスご自身さえもそうだと自覚されていたからかもしれません。

そうであればこそ、「**ただ、神の国を求めなさい**」と、神の御前に共に立つ者として生きることを、お勧めくださったのでしょ。

そこに共に立つ者として、わたしたちは、神のお与えくださるものが、この世界で、わたしたちすべての者にとって、十分に必要を満たすだけのものであることを、確かめさせていただいているのです。

神の恵みは、わたしたちには十分です。この世界をお造りくださったお方は、この世界の必要を満たしてくださるお方なのです。命ある者らをお造りくださったお方は、それぞれの命の日々、人生の初めと終わりをお定めくださり、この世界の必要を満たす恵みの一部として、その者をお用いくださっているのです。

わたしたちは、この恵みに満ちた「神の国」に生き始めています。なお、「思い悩み」があるとしても、もはや、自分のために思い悩むのではありません。今は、神の国のために思い悩み、愛する者のため、この世界の神の恵みを待ち望むすべての人々のために、思い悩むことができるのです。